

ニューヨーク・ニュージャージー港湾・河口域の再生計画から  
「泳げる東京湾を」考える

NEW YORK/NEW JERSEY HARBOR & ESTUARY RESTORATION  
PROGRAM and Aiming to swim in Tokyo bay

島谷 幸宏 (九州大学工学研究院)

Yukihiro Shimatani (Kyushu University faculty of engineering)

shimatani@civil.kyushu-u.ac.jp

アメリカのニューヨーク/ニュージャージー港湾の河口域では、大規模な再生計画 (HRE) が立案され、実施されている。湿地、水鳥の生息地、沿岸海洋林、カキ礁、アマモ場、海岸線と浅瀬、堆積物の汚染物質、支川の接続性、閉鎖的な水域、アクセス性、魚・カニ・ロブスターなどの生息地、土地の取得の 12 項目に対して、2020 年と 2050 年の目標が立てられている。例えば湿地の創造、再生に関しては 2020 年の目標が 1000 エーカー、2050 年が 5000 エーカーで、毎年平均 125 エイカー(50ha)が再生目標となっている。2014-2016 年間で、2020 年までの目標の 25%を達成しており、それぞれの達成度を評価している。

また「ニューヨーク/ニュージャージー湾と河口域プログラム」として広域の湾と沿岸域の再生プログラムが 2017-2022 の 5 年間のアクション・アジェンダが作成され、実施されている。水質、生息場と生態系の健全性、公共のアクセス性と管理、港湾と海事事業、コミュニティの関与の 5 項目に対して明確な目標と対策を掲げている。生息場と生態系に関しては再生計画と同じ内容である。水質に関しては、泳ぐことが可能で漁に適した水質を目標にグレーインフラとグリーンインフラを組み合わせ、CSO 対策、浚渫などを行うことになっている。

一昨年、ニューヨークを訪問した際に、ハドソンリバー・ファンデーションの人から上記のようなお話を聞かせていただいたり、現地を見せていただいたのであるが、日本ではあまり知られていない。アメリカ最大の都市であるニューヨークでは、このような大規模な自然再生が継続的になされ、一方で日本ではなぜできないのであろうか?と強く思った。ニューヨーク・ニュージャージーの取り組みは、この地域の長い市民活動がベースになりながら官民学一体となったグループによって計画が立案されている。計画書には、「当初から、このグループは、河口が人口の多い地域であり続け、人間が絶えず形を変えていることを認めました。したがって、生息地回復に対する「再生」アプローチは、自然と人間が共存する生態系、環境と社会のニーズが同等の生態系要素であるシステムを設計することが HRE にとって最も現実的です。」としている。

参考資料 : Hudson-Raritan Estuary Comprehensive Restoration Plan, <https://www.hudsonriver.org/wp-content/uploads/2017/08/Hudson-raritan-0616.pdf>